

小島なお

奥村俊哉さんの作品は、都市を荒野のように詠い、一陣の言葉の風を広大な空間に自在に吹かせています。ビル街というオカリナに秋の風

関朱夏さんの作品は、自らの心や体を差し出しながら、つねにここではない向こう側の果てを希求しているように。気に入った文字と／ひとつになれたらな／仰向けで上目遣いで 弓

大橋弘典さんの作品は、助詞の効かせ方、言葉同士の斡旋に独創的なセンスが光っています。

坂／降りる へつらうこともない春は
梶伸太郎さんの作品は、現実を虚構へ、虚構を現実へ落とし込むテクニクの華麗さに魅了される。表記も周到。目の前のくつしたを雲が／超えるまで／肉体をキャンセルしていたい

折田日々希さんの作品は、肥沃な詩的土壌がどの作品にも感じられ、ひとつの詩の背後に一冊の物語が展開されるよう。

父親が／高野豆腐を／日没のように食べてて／雨に似る箸
松下誠一さんの作品には、平坦に見える日々に出現する時空のきりぎしを見る思いがします。

セブンティーンアイスの／グレープシャーベット／自死からいちばん遠いところに

白野実悠さんの作品は、自分と他者の、内側と外側の未分化な透徹した世界観がすがすがしい。
シャンプーのゆびさき 星の／まんなかでひかりになっている／さがしてよ

中矢温さんの作品は、俳句の韻律をスプリングボードにしてきらびやかに毒を散りばめています。

ピーナッツバター馬鹿ばっか

吉沢美香さんの作品は、物事の本質にある不気味さを愛を込めて掬ってゆきます。

缶詰めの肉寄っている雪催い

吉富快斗さんの作品は、古典的な語句の雅な手触りを生かしながら、上質で抑制された心を披露してくれる。
金琵琶を煩く感ずる日があつて

清水将也さんの作品は、現代を生きる精神のなまなま
しさを銜いなく、平熱で感じさせる。

誤差なんだ青い瞳に生まれずに／夏を黙って生きてるこ
とも

豊富瑞歩さんは口語詩句奨励賞にも選出されていま
す。刻々と失われてゆく今のとりとめのなさを少し寂し
い口語で慰める。

もう帰るしかない時間の歩き方／昼に見たアゲハ蝶はよ
かった

伊藤万由子さんの作品は、「あなた」や「君」や「母」
との閉じた関係性の濃さに比例するように隔たっている
〈外側〉への視線が印象深い。

2番出口の階段を上る間の感情／だけ連ねた日記

小笠原風花さんの作品は、過去や未来にまつわるあら
ゆる感情を肯定しようとする信念に読者の信念までも導
かれるよう。

雲は水蒸気だから寝転べないよ／と言うだけの簡単なお
仕事です

森山ひかるさんの作品は、人に物事にほんのひとときし
かない純な時間を護るように詠う。「これから」は無条
件に尊い。

保育士の姉は／その言霊はよかったかな？／と叱っている
平間悠之介さんの作品は、すべての言葉が持つ表層的
な意味や、その意味に容易に動かされてしまう人の心に
揺さぶりをかけてゆきます。

ひとはみな／なんて今では言えないね／逢坂の関も壊さ
れちゃったし